

# ブルーメン・フィルハーモニー メンバーによる 室内楽の悦楽 2024

6.2 Sun. 14:00

軽井沢大賀ホール  
KARUIZAWA OHGA HALL

BLUMEN  
PHILHARMONIE  
ENSEMBLE  
CONCERT  
2024



## ごあいさつ

団長 中川 航

〈室内楽の悦楽〉は、ふだんアマチュアオーケストラとともに交響曲などを演奏しているメンバーが中心となって、小規模なアンサンブルの妙味を楽しもうという企画です。

今回取り上げるのは、モーツァルトからストラヴィンスキーまで、時代も地域も楽器編成も異なる5作品。20世紀から18世紀へ、クラシック音楽の歴史をさかのぼりつつ音色や響きの変化を楽しめるようなプログラムとなっています。初夏の軽井沢にふさわしい爽やかな音楽とともに、午後のひとときをゆるりとお楽しみいただければ幸いです。

### 曲目紹介

イギリスの作曲家フィンジ（1901–1956）の「エクローグ」は、ピアノ独奏と弦楽合奏による単一楽章のおだやかな曲。1920年代にピアノ協奏曲の緩徐楽章として構想され、作曲家の死後、独立した作品として出版・初演されました。素朴な旋律と、透き通った繊細な和声と、ほの暗い哀愁をたたえた雰囲気の魅力の知られざる名曲です。

続いてお送りするのは同じく20世紀前半の作品で、ストラヴィンスキー（1882–1971）がバッハの「ブランデンブルク協奏曲」に着想を得て書いたという協奏曲「ダンバートン・オークス」（1938年作曲）。ストラヴィンスキーといえば「春の祭典」など大規模な管弦楽曲が有名ですが、この曲は弦楽器10名と管楽器5名と小編成。バッハの時代の合奏協奏曲の様式を模した3つの楽章からなり、各パートがかわるがわるソロの役回りを引き受けつつ、ユーモアとウィットの応酬を繰り広げます。

ちなみに「ダンバートン・オークス」とは、アメリカはワシントンD.C.にある豪華な邸宅のこと。そこに住む有力な芸術パトロンであったブリス夫妻のために書かれたことから、その名を冠しています。

半世紀ほど時代をさかのぼって19世紀末、フランスの作曲家サン＝サーンス（1835–1921）がコントラバスを含む弦楽五重奏とピアノ、それにトランペットを加えたアンサンブルのために書いた七重奏曲（1880年作曲）にも、同じくバロック音楽のアイデアがふんだんに取り入れられています。4つの楽章がメヌエットやガヴォットといったバロック時代の「組曲」の要素を主体に構成され、ユニゾン進行やフーガ風の処理など、18世紀的な擬古典的書法にあふれています。また、トランペットの華やかな響きは往時の宮廷の祝祭を想起させ、ピアノのきらびやかな音色が彩りを添えます。いっぽうでメヌエットの中間部（トリオ）など、ときおり顔をのぞかせるロマンティックな旋律も魅力です。

さらに50年さかのぼりましょう。メンデルスゾーン（1809–1847）が1825年にわずか16歳で書き上げた八重奏曲は弦楽四重奏二組ぶん、つまりヴァイオリン4名、ヴィオラ2名、チェロ2名の計8名による、弦楽器だけの音の饗宴です。早熟の天才の冴えわたった筆致により、みずみずしく躍動感にあふれた第1楽章から、厳粛な第2楽章、小気味よく疾走する第3楽章、堂々たる威容の終楽章まで、弦の心地よい響きが終始耳を楽しませてくれます。

そして本日の公演を締めくくるのはモーツァルト（1756–1791）の最高傑作のひとつ、ピアノ協奏曲第23番イ長調です。この曲が完成したのはオペラ「フィガロの結婚」初演を目前に控えた1786年3月のこと。優しく語りかけるような旋律とフルート・クラリネット・ファゴット・ホルンのあたたかい響きとが調和し、ほがらかで幸福感にあふれた第1楽章。独奏ピアノの訥々とした嘆き語りにはじまり、虚無と絶望のどん底にある悲しみを天上の美しさへと昇華した第2楽章。突き抜けた明るさで生き生きとよこびを輝かしく謳歌する第3楽章。どの楽章も室内楽的な繊細さと交響曲の華やかさ、オペラの抒情性とが共存し、色彩豊かな音楽をつくりあげています。